

議題⑰ 追加資料 e-0 舞鶴市の将来人口について

◆ 人口動向分析

出典：舞鶴市人口ビジョン(令和2年)

(1) 時系列による人口動向

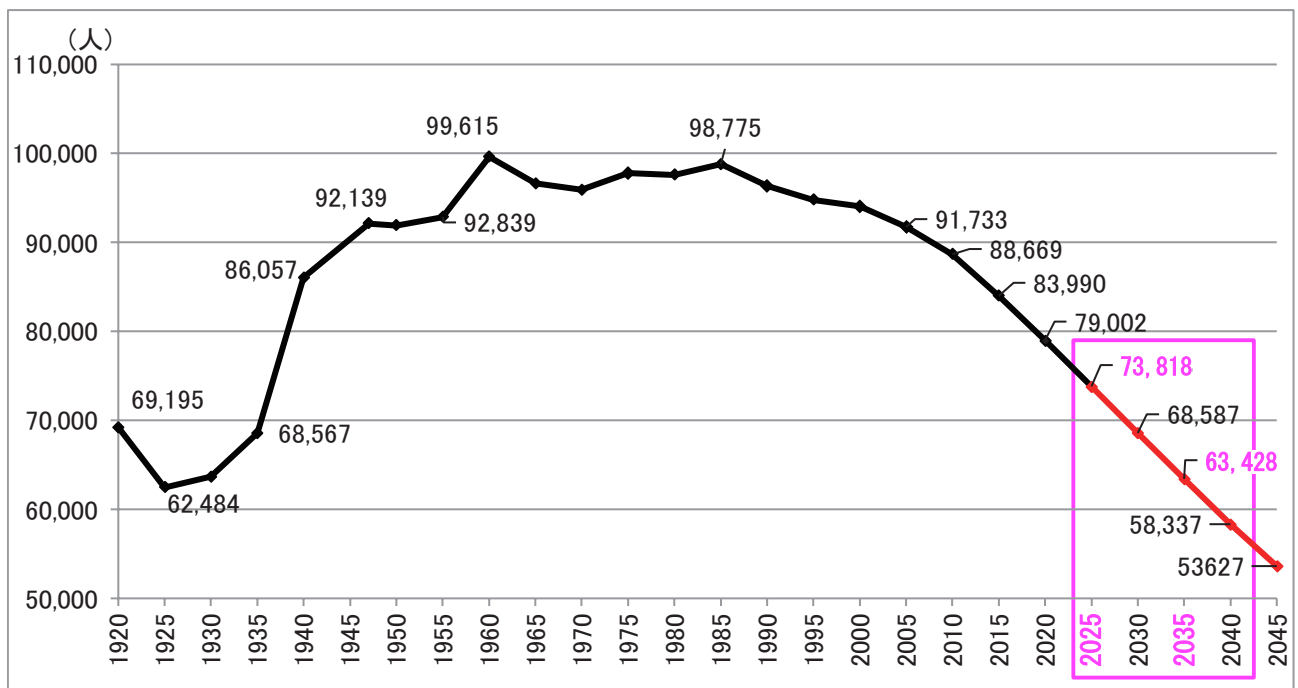
(I) 総人口の推移

本市の総人口は、1947(昭和22)年の 92,139人(国勢調査)以降、1959(昭和34)年の 103,137人(4月1日推計人口)をピークに、2008(平成20)年の 90,001人(10月1日推計人口)まで、9万人台を維持し、推移してきた。しかし、以降は人口減少に歯止めがかからず、2019(令和元)年には 79,886(10月1日推計人口)人と8万人を下回った。

戦前の人口増減の主たる要因は、1921(大正10)年のワシントン軍縮会議に伴う海軍鎮守府の廃止、要港部への転換、海軍工廠の工作部格下げによる人員整理による人口減少(1920(大正9年)：69,195人→1925(大正14)年：62,484人)、1936(昭和11)年の工作部の海軍工廠昇格、1939(昭和14)年の要港部の鎮守府昇格による人員増等に伴う人口増加(1935(昭和10)年：68,567人→1940(昭和15)年86,057人)である。

戦後の人口増減の主たる要因は、1957(昭和32)年5月27日に舞鶴市と加佐町が合併し、現在の市域となり、人口も101,905人(5月27日住民登録人口)となり、10万人を超える市となった。しかし、それ以降は2003(平成15)年まで横ばいで推移していたが、2004(平成16)年に人口動態が自然減に転じ、2010(平成22)年以降においては年間で約1,000人が減少する状態が続いており、2020(令和2)年以降においても同様の減少が続く推計となっている。

図表1 総人口の推移 (1920(大正9)年～2045(令和27)年)



- ※1 1955(昭和30)年以前は、加佐町編入前の市域の人口である。
- 2 2020(令和2)年以降の数値は、国立社会保障・人口問題研究所推計値である。
- 3 2を除く人口は、国勢調査人口(各年10月1日現在)である。

※行政ワーキングチームからの提供資料

議題⑱ 追加資料 e-① 将来人口修正による基準値

◆ 達成すべき基準値の試算
 (舞鶴市の図書館システム全体)

舞鶴市(人口7.8万人)の場合
 全市での資料と職員と施設の基準値

[延床面積]

人口 6,900人	未満1,080㎡を最低とし、
人口 18,100人	までは1人につき0.05㎡
人口 46,300人	までは1人につき0.05㎡
人口152,200人	までは1人につき0.03㎡

→ [延床面積] 4,000㎡
 5.13㎡/市民100人

$$1,080 + ((18,100 - 6,900) \times 0.05) + ((46,300 - 18,100) \times 0.05) + ((78,000 - 46,300) \times 0.03) = 1,080 + 560 + 1,410 + 951 = 4,001$$

☆2025年人口73,818人試算では 3876㎡ 5.25㎡/市民100人
 ☆2035年人口63,428人試算では 3564㎡ 5.62㎡/市民100人

[蔵書冊数]

人口 6,900人	未満67,270冊を最低とし、
人口 18,100人	までは1人につき3.6冊
人口 46,300人	までは1人につき4.8冊
人口152,200人	までは1人につき3.9冊

→ [蔵書冊数] 36.7万冊
 4.71冊/市民1人

(近年先進事例と比べると小さい数字となっている。)

$$67,270 + ((18,100 - 6,900) \times 3.6) + ((46,300 - 18,100) \times 4.8) + ((78,000 - 46,300) \times 3.9) = 67,270 + 40,320 + 135,360 + 123,630 = 366,580$$

☆2025年人口73,818人試算では 350,270冊 4.75冊/市民1人
 ☆2035年人口63,428人試算では 309,749冊 4.88冊/市民1人

[開架冊数]

人口 6,900人	未満48,906冊を最低とし、
人口 18,100人	までは1人につき2.69冊
人口 46,300人	までは1人につき2.51冊
人口152,200人	までは1人につき1.67冊

→ [開架冊数] 20.3万冊
 近年、公開書庫/準開架を含めて
 公開30万冊が推奨される事も多い。

$$48,906 + ((18,100 - 6,900) \times 2.69) + ((46,300 - 18,100) \times 2.51) + ((78,000 - 46,300) \times 1.67) = 48,906 + 30,128 + 70,782 + 52,939 = 202,755$$

☆2025年人口73,818人試算では 195,771冊
 ☆2035年人口63,428人試算では 178,420冊

[資料費]

人口 6,900人	未満1,000万円を最低とし、
人口 18,100人	までは1人につき796円
人口 46,300人	までは1人につき442円
人口152,200人	までは1人につき466円

→ [資料費] 4600万円/年間
 590円/市民1人

$$10,000,000 + ((18,100 - 6,900) \times 796) + ((46,300 - 18,100) \times 442) + ((78,000 - 46,300) \times 466) = 10,000,000 + 8,915,200 + 12,464,400 + 14,772,200 = 46,151,800$$

☆2025年人口73,818人試算では 44,202,988円 599円/市民1人
 ☆2035年人口63,428人試算では 39,361,248円 621円/市民1人

[年間増加冊数]

人口 6,900人	未満5,574冊を最低とし、
人口 18,100人	までは1人につき0.32冊
人口 46,300人	までは1人につき0.30冊
人口152,200人	までは1人につき0.24冊

→ [年間増加冊数] 25,000冊/年間

$$5,574 + ((18,100 - 6,900) \times 0.32) + ((46,300 - 18,100) \times 0.30) + ((78,000 - 46,300) \times 0.24) = 5,574 + 3,584 + 8,460 + 7,608 = 25,226$$

☆2025年人口73,818人試算では 24,222冊/年
 ☆2035年人口63,428人試算では 21,729冊/年

[職員数]

人口 6,900人	未満6人を最低とし、
人口 18,100人	までは100人につき0.025人
人口 46,300人	までは100人につき0.043人
人口152,200人	までは100人につき0.041人

→ [職員数] 34人
 市民2.3千人/専任職員1人

$$6 + ((18,100 - 6,900) \times 0.025/100) + ((46,300 - 18,100) \times 0.043/100) + ((78,000 - 46,300) \times 0.041/100) = 6 + 2.8 + 12.126 + 12.997 = 33.923$$

☆2025年人口73,818人試算では 32,208人
 市民2.3千人/専任職員1人
 ☆2035年人口63,428人試算では 27,948人
 市民2.3千人/専任職員1人

1989年1月 確定公表 2004年3月 改訂
 日本図書館協会図書館政策特別委員会

それぞれの自治体において早急に達成されるべき数値基準
 舞鶴市立図書館基本計画 策定準備部会参考資料として試算

◇コメント

※図書館政策重視の度合いによって、自治体が掛ける歳費と体制は二極化しつつあり、その図書館政策成果も二極化している。

※図書館政策重視の自治体では図書館ネットワークの施設群の総面積は、左記の基準値を大きく超え、中央館の再整備にあたり、人口規模には無関係に、基準が無意味であるかのように格段に大きな施設を造っている。

人口同規模の中央図書館近例

- ・安城市：34.0万冊/6810㎡
 - ・日進市：19.8万冊/6100㎡
 - ・南相馬：28.2万冊/5400㎡
 - ・東松山：15.8万冊/5210㎡
 - ・犬山市：14.8万冊/4960㎡
 - ・君津市：33.6万冊/4900㎡
 - ・八千代：13.8万冊/4860㎡
 - ・守山市：20.7万冊/4170㎡
 - ・田原市：31.3万冊/3970㎡
 - ・大府市：24.9万冊/3650㎡
 - ・塩尻市：20.1万冊/3290㎡
- (開架規模は公開書庫含む)

※図書館政策投資の成果は一義的には貸し出し冊数といわれてきた。そして貸し出し数が、資料費増減と相関していることが統計研究で明らかになり、その最低基準を、左の計算式で明らかにしている。舞鶴市立図書館では、年間に、4600万円の資料費と2.5万冊の新しい資料補充が必要であると算出されている。

レファレンスや多様な図書館の利用への展開が、資料提供から生じる市民からの信頼に始まることも、先例の証明するところとなっている。

※現状の図書館運営では、(奉仕対象人口) / (専任職員+非正規雇用職員) というチーム体制で必要人員を確保している。

※舞鶴市HP人口動向分析では、図書館再編完了の2025年推計人口は73,818人に減少している。左試算も縮小後人口値でもよいのではないかという意見が行政WGから指摘あり。☆印で試算値を併記した。また2035年人口計算値も併記した。

議題⑰ 追加資料 e-② 開架冊数と施設面積の追加説明

3-1-① 新中央図書館の資料収蔵と面積の配分

舞鶴市新中央図書館は、どのような活動と施設環境を旨とすか、を考え組み立てます。

◆ 資料配置計画：将来的蔵書構成目標と施設収容能力

図書館施設計画にあたり、各部門の収容配架すべき資料規模について、開館10年～15年を経た時期の、目標とする資料構築期を想定します。

<開架資料>	:	170,000冊 + α
・一般、青少年	:	120,000冊
・児童	:	30,000冊
・新聞、雑誌、逐刊	:	500タイトル
・AV、視聴覚	:	10,000点
・オンラインデータベース、電子ジャーナル	:	件
・参考資料	:	5,000冊
・地域資料/行政資料	:	15,000冊
<準開架資料>	:	100,000冊 + α
・自由接架型公開書庫	:	100,000冊

開架系資料
合計：
270,000冊

※東西館開架資料
現合計：157,000冊
約1.7倍、30万冊目標
※館外貸出し資料
を含めた総数を
30万冊と考える。

<閉架資料>	10万冊 →	200,000冊
・積層書庫式固定書架	:	70,000冊
・暫時増設可動集密架	:	3万冊 → 増設で13万冊まで
<地域BM奉仕・学校支援・整理作業書庫>	:	44,000冊
・BM、学校団体貸出書庫	:	40,000冊
・受入れ、整理、修繕	:	3,000冊
・貴重図書、特別収蔵庫	:	1,000冊
<<中期目標の蔵書合計>>	:	514,000冊

※分館資料入替え
動かない資料の
引き取り収蔵

※東西館蔵書資料
現合計：23.6万冊
約2.18倍の収蔵力に。

→将来書庫増設で51万冊まで収蔵可能にしておく。

◆ 新中央図書館の各場：機能と面積配置計画（4000㎡案）の概要

□ 図書館としての床面積 : 3700㎡

- 資料配置と利用者の居場所からの最小な必要面積を次頁に洗い出した。
- 各階の床面積を広くとれないと、共用スペースが増大する。
- 書庫については20万冊とした。年間2万冊新規購入で10年分と少ない。
- 開架30万冊収容、閉架書庫20～30万冊の条件では5000㎡図書館になる。
- 公開書庫形式を開架に併置する手法で、3700㎡規模図書館に圧縮した。

□ 市民交流／多目的フリースペース : 300㎡～

- 集会と展示にかかわる機能は図書館要素として重要視されてきている。
- 近年はさらに、情報系や喫茶系やフリースペース系を併設させたいという市民要望が高く、図書館機能が割愛されている事例も散見される。
- 事業計画や市民要望など精査をふまえ、300㎡を超える場を企画したい。

□ 駐車台数と環境 : 140台 + 仮置場

- 図書館計画としての駐車場の必要台数算出資料を巻末に整理した。
- 中規模分館のない駅前拠点でもあり、現実には不足傾向になる台数かと、これまでの先例から予想される。利用時間制限や有料化など事例有り。
- 浦西や積雪もあり、障がい者駐車場から入口に上屋庇など欲しくなる。
- 透水性舗装や雨水貯留施設、緑化などSDGs環境対応が必要になる。

□ 駐輪場台数と環境 : 140台

- 図書館計画としての駐車場の必要台数算出資料を巻末に整理した。
- 駅前広場にも平日利用の通勤通学用駐輪場があり、土日祝日に集中する図書館利用は、全体で数量調整が可能かもしれない。現状駐輪場の利用調査などふまえ設計時に精査。屋根庇が必要、床面積が発生する。

□ 浦西、降雪に対応する屋外環境

- 近年の寒冷地方の事例にカナル型読書テラスがある。中間季は開放し、寒季は硝子扉と床暖房で快適になる。北欧図書館のウィンターガーデン形式。
- 浦西や積雪のある図書館として、外周の庇回廊など環境設備が望まれるのではないだろうか。冬期のBM積み込み業務にも対応が必要になる。

※30万冊開架規模について：
・図書館の利用の質が高度で専門的に飛躍した先進図書館の事例から、30万冊開架が待望される。
・開架資料が30万冊を超える界限から、利用が格段に上昇することが各地で観察されている。
・開館後に時間を経て、図書館が魅力を減退させる要素／機能は、提示される資料規模の限界と言われている。開館から10～15年後の開架を30万冊に近い目標像として資料構築を図り、図書館の魅力を成長させていきたい。施設計画が図書館の成長の壁にならないよう規模を準備したい。

※左記17万冊開架規模について：
・2章の日本図書館協会「達成すべき基準値」試算は開架冊数を20.3万冊(人口縮小でも19.6万)としている。
・併行する行政WGでは、開架冊数の増大は施設床面積増大など、具体化の高ハードル化が懸念された。
・先進事例研究から、30万冊開架を満足しつつ、施設規模を圧縮する<準開架/公開書庫>併設方式を想定して、左記想定をまとめた。

※4000㎡規模案について：
日本図書館協会の研究公開資料の試算から必要規模を試算した。近年はこの試算規模を大きく超えて各市で新館建設がみられる。(図書館本来の計画性を超えて、中心市街地活性化や賑わい創出が目的で施設課題も見える。)
※消防法で大型複合にスプリンクラー設置)舞鶴市では地域館と呼べる規模の分館が無く、中央図書館が1館で直接奉仕と全域奉仕を行う。そこで上限4000㎡を仮説して、市民交流機能300+図書館3700を枠組みとして、必要機能とスペースの積上と圧縮調整を行った。個別のサービスと場への具体的な要望議論のたたき台としたい。

※日本図書館協会の研究には有効な分館野最低規模を800㎡5万冊とあり、市内3分館は該当しない。

※市民活動支援自由スペース300㎡について：
・先進的図書館の事例とされる塩尻市図書館えんばーくの特徴に3～5階のフリースペースがある。図書館面積に含み、比率も高い。
・福知山駅前図書館は2482㎡と表示されるが、上階3.4階に市民交流機能(公民館)3945㎡を複合、延べ床6427㎡となっている。
・君津市や南相馬市の図書館建設では、3700㎡程度の図書館機能に加えて、地域交流センターや地域情報センターの名称で集会展示機能1500㎡を複合させた。時を経て、両館とも全体を図書館として条例に位置づけ運営がされている。(詳細は日本図書館協会統計による)
・開館25年の伊万里市民図書館は、当初延床3700㎡の計画だったが、法律運用の改正で、書架で築造された積層書庫上階床が面積算入され、4000㎡図書館となった。